

『洛納奚囊』

——中井履軒の京都市行

湯城 吉信

はじめに

中井履軒は幽人（世捨て人）と称し自適の生活を送り、後世に歴大な著作を残した。兄竹山とは違い直接懷徳堂の校務に携わることもなく、また仕官の招聘にも応じることがなかったという。その履軒が一度だけ官仕えをしたことがある。明和三年（一七六六）、三十五歳の時から一年間の京都滞在がそれである。

履軒は公家の高辻世長の補佐役として京都に招かれた。高辻世長（後胤長と改名）は、菅原道真の末裔で、代々文章博士を司る家系であった。履軒が招かれたのは、中井家と縁のある京都の革嶋家が高辻家に仕えていた関係によると考えられる。

だが、すでに幽人としての生き方を宣言していた履軒が、どうして京都へ行ったのだろうか。また京都ではどのような一年を過ごしたのだろうか。『懷徳堂考』中井竹山・中井履軒など従来の研究からは、この二つの問いに対する十分な答えを見つけ出すことはできない。

一つ目の疑問「どうして京都へ行ったのか」については、私は一言で言えば、履軒がまだ不惑の年に達していなかったからだと考える。その根拠は、『履軒古風』巻二に見える、京都市行に先立つ時にある。その紹介は稿を改めたい。本稿では、二つ目の疑問「京都での一年はどのようなようだったのか」

を探る資料として、履軒著『洛納奚囊』の内容を紹介したい。

『洛納奚囊』の洛納とは京都の中の意で、奚囊とは詩文を入れる袋の意である。京都市行の出發から帰阪までの詩を製作順に並べている。詩であるため、履軒の客観的状況を説明する材料には乏しいが、履軒の心情は如実に表れている。本稿では、百聞は一見に如かずとの諺に基づき、論じるよりも作品をそのまま紹介する形態を取る。ただし、私に解説できない箇所は疑問符（？）をつけている。博雅の士の御教示を仰ぐ。

テキストは、懷徳堂文庫所蔵の履軒手稿本を底本とし、適宜他本を参照した。履軒の詩集『履軒古風』巻二にほぼそのまま収録されているので、それも参照した。

注

- (一) 西村時彦『懷徳堂考』下八四頁。
 - (二) 加地伸行編『中井竹山・中井履軒』一九四頁。
 - (三) 履軒が幽人と称し、自適の生活を目指したのは、京都市行に先立つ。
- 『懷徳堂考』中井竹山・中井履軒 一八六頁を参照のこと。

『洛納奚囊』全詩

一、丙戌仲冬、將北入京、飲別諸友(丙戌仲冬、將に北の

かた京に入らんとし、諸友と飲別す)

*丙戌は、明和三年(一七六六)。送別会での作。参加者の詩は『懷徳堂
會餞詩卷』にまとめられている。別れを惜しみながらも、履軒の出世を
祝う詩が多い。拙稿『懷徳堂會餞詩卷』訳注―中井履軒京都行の送
別詩(『中国研究集刊』陽(三四)号、大阪大学中国学会、二〇〇三年)
を参照。

此別非遠別 此の別れ遠き別れに非ざるに

何事意惆々 何事か意惆々

雪裏若相思 雪の裏に若し相思わは

長江一夜棹 長江に一夜棹ささん

(注)*雪裏若相思……王子猷が戴安道に会いたいと思い、雪の夜に船を
出し彼の家の前まで来たが、興が尽きたので会わずに帰ったという故事
が『世説新語』任誕篇に見える。履軒の和文書『華寄嚮語』所収の「独
ふね」(京都華嶋家への訪問を題材にした紀行)の中でも「みやこ(都)の
かたのゆかしきおりおりは雪にも花にも剡溪の棹*をわたくしもの(私
物)にしたる」との文句が見える(剡溪は戴安道が住んでいた場所)。転
句、結句はこの故事を前提として作られたものであろう。

(訳)遠くに行くわけではないのに、どうしてこんなにつらいのか。でも、

もし会いたくなったら一晩舟を漕げばいいだけのこと。

二、離席、奉答伯兄(席を離れ、奉みて伯兄に答う)

*離席は送別会のこと(『昔の旅』に同様の用例あり)。

世事可長歎 世事 長歎すべし

臨別心緒乱 別れに臨んで 心緒乱る

分離能幾歳 分離 能く幾歳

豊城一双劍 豊城 一双の劍

(訳)世の中つらいものです。別れに臨んで心が乱れます。とれだけ離れ
離れていられるでしょう。我々はあの豊城の一对の劍なのに。

(注)*豊城一双劍……『晋書』張華伝に、「太阿」「龍泉」の二つの名劍
がいつしよに埋まり、光を放っていたとある。この劍は張華が偉くなっ
てから拵びるべき劍。自分たちが名臣に仕えるべきことを示唆するか。

*「豊城一双の劍」の喩えは、不可分を表すのだから、名劍に喩えるの
は当然自負もある。西村時彦の「互に文運を興さんとの誓いもやありけ
ん」(『懷徳堂考』下六二頁)という文句はここによるか。

三、既上舟、奉寄伯兄

(既に舟に上り、奉みて伯兄に寄す)(三首)

*京都に行く途中の作。当時、大阪から京都へは舟で淀川を遡ることが
多かった。自嘲しつつも期待を秘めているようだ(山中浩之も同感。『中

井竹山・中井履軒』一九四頁。

行李書半船 行李書船に半ばす

乗月遡澗水 月に乗じて澗水を遡る

自笑閉戸生 自ら笑う閉戸生

多事徒茲始 多事茲より始まらんと

(注)*行李書半船……『履軒小乗』という雑記帳にこの京都行の荷物が記されており、おびただしい数の書物と器物を持参したことがわかる。

(訳)荷物は書物が船半艘、月夜の中、淀川を上ります。ああ、世間知らずの書物の虫の厄介事はこれから始まるのだな、と自嘲します。

(参考)竹山『真陰集(詩集)』卷三「答弟処叔之京却寄三首」では「来時曰、自笑閉戸生、多事徒茲始」に対し、「平安山水窟、卜築愜幽情、祇恐花開日、依然閉戸生」(花が咲いても書物の虫では困るぞ)と返している。

其二

遺業分一經 遺業一經を分かち

浮遊向京洛 浮遊し京洛に向かう

休憂阿徳貧 憂うるなかれ阿徳は貧しく

自無塵繩縛 自ら塵の繩縛するなし

(訳)(これまで)いっしょに継承してきた(父祖の業を分かち、私はふらふらと京都へと向かいます。でも心配しないで下さい。貧乏人の私は、世俗の塵に縛られることはありませんから。

*私は俗世に縛られることはありませんとは、出世などせずに帰ってきて

ますということか。

(参考)竹山『真陰集(詩集)』卷三「弟処叔之京却寄三首」では「来時曰、

休愁阿徳貧、貧時即是福」とある(異同注意)。それに対し竹山は「雖作

朱門客、敝袍無顔色、自後京師信、飽聞好消息」(相変わらずだな、いい

知らせを待っているよ)と返している。

其三

生来一雙身 生来一雙の身

今始辞広被 今始めて広被を辞す

縦有濁醪酌 縦い濁醪の酌む有れども

恐不敵雪威 恐らくは雪威に敵わず

(訳)これまでずっといっしょだったのに、今私は初めてあなたの温かい庇護の下を去ります。たとえ濁り酒を飲んでも、向こうの寒さ(心の寒さもあるだろう)を凌ぐことはできないでしょう。

(参考)竹山『真陰集(詩集)』卷三「答弟処叔之京却寄三首」では「来時曰、生来一雙身、広被今始辞」とある。それに対し竹山は「同室如讐敵、悠悠天下是、分異無多憾、乾坤一広被」(渡る世間に鬼はなし)と返している。

四、至京、奉寄伯兄

(京に至り、奉みて伯兄に寄す)(二首)

形影今分離 形影今分離し

兩地長凄酸 兩地にて長く凄酸す

夜々各挑灯 夜々各々灯を挑げ
応照往来魂 応に往来の魂を照らすべし

(訳)二心同体であった形と影とが今別れ、二つの地で嘆き合う。夜毎にお互い灯りを掻くと、魂を映し出すことができるでしょう。

其二

夜々魂飛去 夜々魂は飛び去り

在君残灯辺 君が残灯の辺りに在り

誰看睡覺時 看るを誰う睡覺する時

君影是我身 君が影は是れ我が身なるを

(訳)夜毎に魂は飛び、あなたの燃え残る灯の辺りに行きます。お休みにする時にどうぞご覧になって下さい。あなたの影は私自身なのですよ。

(参考)竹山『真陰集(詩集)』巻三「予喪女布美日適得処叔憶予時攬涙和之二首」とし、上記二首に対し「爾写還郷夢、字字極悲酸、豈知屋梁外、別有不帰魂(悲惨なのはお前だけではない)」「女死猶在褥、举室啼枕辺、新詩床下落、擬為阿弟身(お前も思ってくれているのか)と返している。布美は十一月二十七日に一歳にならずしてなくなった(以下「親家書有感」詩参照)。

五、雪朝奉皇曾公(雪の朝、奉みて曾公に呈す)

*曾公は高辻胤長卿のこと。菅原道真の末裔なのでこのように言う。

宵聴白雪調 宵に白雪の調べを聴き

魂遊瑤台辺 魂は瑤台の辺りに遊ぶ

曉來推窓戸 曉來窓の戸を推せば
宛然夢中看 宛然として夢中に看し

公有白雪什。昨夜朗誦使積徳聰焉。

(公に白雪の什有り。昨夜朗誦し、積徳をして焉を聴かしむ。)

(訳)宵に白雪の調べを朗誦していただき、魂は玉の台(雪の積もった台)に飛遊しました。朝になって窓を開けてみるとあたかも夢の中でのような景色が広がっていました。

六、親家書有感(家書を観て感有り)

*十一月二十七日以降の作。(注)参照。

孤身在他郷 孤身他郷に在り

家書備發絨 家書絨を發くに備し

小姪聞天折 小姪天折するを聞く

恐有哀懇言 恐らくは哀懇の言有らん

(注)*小姪聞天折……竹山の娘布美は十一月二十七日に一歳にならずしてなくなった(中井竹山・中井履軒『二八五頁』。前掲「至京、奉寄伯兄」詩(参考)を参照。

(訳)独り異郷にあり、家書を開くのもめんどつくさい。幼い姪が亡くなったと聞いたが、その嘆きが述べられているだろうから。

*履軒の心も閉じているか。「それだけでなく私も私はつらいのに」という気持ちか。

七、聞槐庵兄落新居、有此寄

(槐庵兄の新居を落するを聞き、此の寄有り)

*明和四年(一七六七)春の作。槐庵は古林相如、字正民、槐庵はその号。『懷徳堂会儀詩卷』に見える。竹山『眞陰集(文集)』巻九に墳誌がある。

輪奐開盛宴 輪奐として盛宴を開き

春生醉舞中 春は生ず 醉舞の中

孰知孤館雨 孰か知らん 孤館の雨に

裂袋窻壁孔 袋を裂きて壁の孔を窻ぐを

(注)*輪奐……建物の壮大美麗な様。

(訳)盛大に宴を開き、酔い舞う中に春は生じる。(一方)誰が知ろう、独り暮らしの私が、端切れを裂いて雨漏りを防いでいるのを。

*転句結句は大げさで、新居祝いに不吉過ぎる。ただ、それぐらい滅入っていたということだろう。

八、永輔義佐寄酒鷄子来、題簡背謝之(永輔・義佐 酒と鷄

子とを寄せ来たり、簡背に題して之を謝す)

*永輔とは早野仰斎(名辨之、字士蒼)。履軒より十四歳年少だが履軒と親しかったらしく、この詩以外に「述客中況、答早士蒼」「憶旧遊寄早士蒼」「答早士蒼」(三首)にその名が見える。義佐とは原氏(校勘参照)。簡背とは書翰の裏。

破愁莫若酒 愁いを破るは酒に若くは莫し

飲酒須肴美 酒を飲むは須く肴美かるべし
故人並相贈 故人並びに相贈る
深知加餐意 深く知る加餐の意を

(校勘)『履軒古風』では「永輔義佐」を「早原」に作る。

(注)*加餐……栄養を取り、養生すること。また、人の健康を祝す書翰語。

(訳)愁いを解くには酒が一番。酒を飲むには肴が大事。その両方を贈ってくれた友に、私を思ってくれる情の深さを知った。

九、述客中況、答早士蒼

(客中の況を述べ、早士蒼に答う)

*早士蒼は早野仰斎(名辨之、字士蒼)。「永輔義佐寄酒鷄子来、題簡背謝之」詩参照。

隠淪不挾地 隠淪 地を挾ばず
孰知方朔賢 孰か知らん 方朔の賢を。
五斗無折腰 五斗に腰を折る無きも
未裁婦去篇 未だ婦去の篇を裁せず。
器々耽吟哦 器々として吟哦に耽り
飽看雪裏山 雪の裏の山を飽くまで看る。
依然旧阿蒙 依然として旧の阿蒙
鷄毛又一年 鷄毛 又一年。

(注) *方朔……東方朔。漢の武帝の時代の人。後世、朝隠(朝廷に仕えながら隠者の心を守る人)として有名。『文選』に「答客難」(卷四)と「非有先生論」(卷五)とがある。「答客難」はうたが上がらないことを人に咎められ、それに答える形式の文章。東方朔は、時代が悪いからだと言いつつ、それでも我が身を修めるべきだと説く。「非有先生論」では、才能がありながら發揮しないのは不忠だと咎められた非有先生(架空)が、今は諂う者が昇進する世の中だと批判する。履軒は自分の境遇、生き方を東方朔と重ね合わせたのであろう。『文選』には他に、夏侯湛作の「東方朔画贊」がある(卷四七)。東方朔がその才能を十分發揮できず不遇をかこちながらも、世俗に対して一定の距離を保ち、よく自己を持したことを称える。「朝隠」の語が見える。

*五斗無折腰……陶淵明は、五斗の米のためにへこへこしない(官仕えない)と言つて、「帰去来の辞」を書いて故郷に帰り、隠遁生活を送つた。「陶淵明伝」に「淵明歎曰、我豈能為五斗米折腰向鄉里小兒。即日解綬去職、賦歸去来」とある。履軒が陶淵明に傾倒していたことは『履軒古風』序に述べられている(「酷愛彭沢之辞」*彭沢とは陶淵明のこと)。「履軒小乘」の京都への携帯した本のリストにも『彭沢集』が見える。

(歌) 隠遁するには場所は関係ない。誰が朝廷に仕えながら隠者の心を持った東方朔の賢を知ろう。五斗の米のために腰を曲げないが、まだ陶淵明のように『帰去来の辞』は著していない(隠遁はしていない)。ひたすら詩を吟じ、見飽きるほど雪の山を見る。私は相変わらず、ただ賢が一年分伸びただけ。

*心は隠逸。私は無為に一年を過してしまつたと言ふ。「飽看雪裏山」は「南帰途中口号」其二に「胸襟飽烟霞」の表現があるのを参照。

一〇、羈鳥辞、上菅公(羈鳥の辞、菅公に上る)

*羈鳥は陶淵明「帰園田居(其二)」に「羈鳥恋旧林」の句あり。

有鳥有鳥	鳥有り 鳥有り
離々其音	離々たり 其の音
紛群飛而棲止兮	紛として群飛し棲止し
于海之澗	海の澗 <small>つら</small> にあり
朝飲朝陽之清露兮	朝に朝陽の清露を飲み
暮啄沙水之琅玕	暮に沙水の琅玕を啄む
毛羽皓其修潔兮	毛羽は皓として其れ修潔たり
浴乎月中之醴泉	月中の醴泉を浴びる

(注) *離々……雍に同じ。和らぐこと。

(歌) 鳥あり、鳥あり、その声は和やか。紛然と群れ飛び、海辺に憩う。朝には朝露を飲み、夕べには夕べの露を含む。羽は真白く清潔で、月の甘露を浴びる。

世不与我周兮	世 我と周 <small>まわ</small> らず
時續紛其嘉鳩	時 續紛として 其れ鳩 <small>たね</small> を嘉 <small>よ</small> みす
悲素秋之將尽兮	素秋の將に尽きんとするを悲しむ
兼腹黃而其零	兼腹 黄ばみ 其れ零 <small>はら</small> む
景翳々其西傾兮	景 翳々として 其れ西に傾き
氣凜々以凄然	氣 凜々として 以て凄然たり
海風忽飄兮揚海	海風 忽ち飄り 海を揚 <small>た</small> げ
獨駭飛兮失乎群	獨い 駭 <small>おどろ</small> き飛 <small>と</small> びて 群を失 <small>な</small> う

(注) *世不与我周……「離騷」に「雖不周於今之人兮」という文句がある。
*時續紛其嘉鳩……「離騷」に「時續紛其變易兮」という文句がある。
*鳩……毒鳥。「離騷」にも見える。

(訳) 世は私と合わず、時流は乱れて悪者を喜みする、秋の暮れんとするを悲しみ、葦は色褪せ凋む。影は黒々と西に傾き、気は張りつめ寒々しい。海風が急に起こり波を立て、慌てふためき、群れを失う。

冲碧雲而追紫電兮

碧雲に冲りて紫電を追い

汨瀟々以冉々

汨瀟々として以て冉々とす

蔽長江以北征兮

長江を蔽いて以て北征し

歴交野与鳩岑

交野と鳩岑とを歴る *鳩岑は九岑か。

瞻下土而回翔兮

下土を瞻て回翔すれば

維荆棘之馳雜

維れ荆棘の馳雜たりて

其胡可止

其れ胡ぞ止まるべき

(注) *汨瀟々、冉々……ともに行く様。

(訳) 雲にぶつかり、雷を追い、行きまた行く。長江を下に北征し、交野と鳩岑とを過ぎる。地上を見て旋回すると、いばらが生い茂り、留まる

ことができない。

乃奮翮而増逝

乃ち翮を奮いて増逝し

望叡嶽兮下垂

叡嶽を望みて下垂し

臨于鴨水之清漪兮

鴨水の清漪たるに臨み

集乎秋桂之瑤枝

秋桂の瑤枝に集まる

水冷々其激激兮

水冷々として其れ激激し

樹琅々以芬菲 樹琅々として以て芬菲たり
薄斂我翼 薄か我が翼を斂め
薄休我趾 薄か我が趾を休む

(注) *増逝……飛び去る。*叡嶽……比叡山を懸けるか。*鴨水……鴨川のことか。*懷旧林……陶淵明「帰園田居(其二)」に「羈鳥恋旧林」とある。

(訳) そこで、羽ばたき舞い上がり、叡嶽を望んで下降し、鴨水の清流に臨み、玉のような桂の枝に憩う(止まる)。水は冷ややかに澄み渡り、木はさざめき芳しい。いささか我が翼を収め、足を休める。

懷旧林而悲鳴兮

旧林を懷いて悲鳴すれば

雲霧々其曾々

雲霧々として其れ曾々たり

邈修遠而無道兮

邈として修遠にして道なく

聊倚南枝而制檜

聊か南枝に倚りて檜を制る

結蕙蔭而為屋兮

蕙蔭を結びて屋と為し

藉江離以為褥

江離を藉きて以て褥と為す

樹翳鬱而多雨露兮

樹翳鬱として雨露多く

溜我衣之埃塵

我が衣の埃塵を溜う

(注) *曾々……重なる(「離騷」)。*修遠……はるかに遠い。*倚南枝……

…「巢南枝(南枝に巢くう)」で、故郷を慕う喩え。古時の「行行重行行」に「胡馬依北風、越鳥巢南枝」の句がある。*蕙蔭……香草(「離騷」)。*江離……香草(「離騷」)。

(訳) 故郷の林を想い悲しく鳴けば、雲は黒々と重なり合う。はるか遠

くして道もなく(*無道に懸けるのであろう)、しばらく南の枝に倚つて
巢を作る。香草を束ねて屋根とし、別の香草を敷いて布団にする。木
の蔭は鬱蒼として雨露を多く含み、私の衣の塵を洗ってくれる。

吸花藥而為飲兮 花の藥を吸いて飲と為し
披秋爽以為餐 秋の爽を披いて以て餐と為せば
維韻都以馨香兮 維れ韻都として以て馨香あり

言發我好音 言に我が好音を發すれば

音玲瓏以清越兮 音玲瓏として以て清越たりて
樹珞々以和 樹珞々として以て和す

月正午而天暹兮 月正午にして天暹く
星辰衆而漢斜 星辰衆として漢斜めなり

(注)*好音……『詩經』に見える。

(訳)花の藥を吸って飲み物とし、秋の爽を拾って食事とすると、韻都と
香りがよい。ここに我が麗しき声を發すれば、玲瓏として澄み渡り、木
はさらさらと和す。月は南中し天近く、星はきらめき、天の川は斜めに
横たわる。

窺閨闥以彷徨兮 閨闥を窺いて以て彷徨し
弗庸於永夜之將央 永夜の將に央きんとするを庸らず
於戲修潔而芬芳兮 於戲修潔にして芬芳たり
寔得我所 寔に我が所を得
聊逍遙以延行 聊か逍遙して以て延行す

(注)*閨闥……天上界の門(離騷)。*延行……「離騷」に「延行乎

吾將反」とある。

(訳)天上の門を窺って彷徨し、長い夜が尽きるのにも気づかない。ああ、
清らかで香りも豊か。本当に我が所を得たと感じ、しばらく逍遙し佇む。

(参考)『箕陰集(詩集)』卷二「謁式部曹公隨賦呈」(弟処叔之遊昔公門下
也、予作孤雁歌送之。弟辱礼遇、乃謝以羈鳥辭。故及之云。)

*繫がれた鳥とは自分のことか。

*展開・語彙ともに「離騷」に類似する。履軒が「楚辭」に傾倒していたこ
とは「履軒古風」序に見える(「有傲于楚之騷」*楚とは「楚辭」、騷とは
「離騷」。「履軒小乘」中の京都への携帯した本の一覽にも「楚辭」の名
が見える。

一一、丁亥早春自帰省浪華至、題所携梅花、上菅公

(丁亥早春 浪華に帰省するより至り、携うる所の

梅花に題し、菅公に上る)

*丁亥は明和四年(一七六七)。早春、大阪に帰省して京都に戻ってきて
からの作。

南国旧京梅 南国 旧京の梅
擔頭一枝馨 頭に擔けば 一枝の馨
帰来把似君 帰来たり 把れば君に似
風韻至今清 風韻 今に至るまで清し

(訳)南国難波京の梅、頭に挿せば一枝分の香り。帰って来て取ってみ

るとあなたに似て、その香りは今も消らか。

*梅の風韻を昔公に喩える。

一一、偶成

*春の作。

有客立我門

客有り 我が門に立ち

剥啄驚孤眠

剥啄と孤眠を驚かす。

推枕起延之

枕を推して起きて之を延き

相看両欣然

相い見て 両に欣然たり。

坐来無寒温

坐し来たれば 寒温無く

談笑在簡篇

談笑 簡篇に在り。

春花当窓発

春花 窓に当たりて発き

好鳥隔墙聞

好鳥 牆を隔てて聞こゆ。

遙園乞隣蔬

園を遙て 隣蔬を乞い

沽酒醜客錢

酒を沽うは 客錢に醜る。

对酌無賔主

对酌 賔主無く

陶然倒青樽

陶然として 青樽を倒く。

興尽君宜去

興尽きれば 君宜しく去るべし

莫厭我廬貧

我が廬の貧しきを厭う莫かれ。

百年只如此

百年 只だ此くの如し

庶無役我心

我が心を役する無きを庶う。

(注)*剥啄……毘顔。コツコツ。*相看両欣然……李白「独坐敬亭山」相看兩不厭。*談笑在簡篇……陶淵明「答龐參軍」に「談諧無俗調、

所説聖人篇」とあるのを参照。*興尽君宜去……「陶淵明伝」に「淵明若先醉、便語客、我醉欲眠、卿可去。其真率如此」とあるのを参照。

(訳)客が門の所に立ち、コツコツと独り寝を驚かす。起きあがつて招き入れると、二人共喜び合う。

挨拶は抜きた、話は書物のこと。春の花が窓辺に開き、鳥のさえずりが扉の向こうに聞こえる。

庭を越えて隣の野菜をもらいに行き、酒を買うのは客の金に頼る。賔主の別なく酒を酌み交わし、陶然として樽を傾く。

興が尽きれば帰ってくれ、私の庵の粗末さを心配なさるな。百年経ってもこのままだ、私が望むのはただ心を勞するものがないことだけ。

一三、憶旧遊寄早士營(旧遊を憶い、早士營に寄す)

*早士營は早野仰斎(名辨之、字士營)。「永輔義佐寄酒鶏子來、題簡背謝之」詩を参照。春の作。

春遊今如何 春遊今如何

臨風憶昔年 風に臨みて 昔年を懐う。

散步城西路 「散步す 城西の路

芳洲其未遠 芳洲 其れ未だ遠からず。

茅屋唯三間 茅屋 唯だ三間

炊爨待上賓 爨を炊きて 上賓を待す。

賔多坐不容 賔多くして 坐容れず

命席統堂廉 席をして 堂廉に続かしむ。

行厨各闕奇 行厨 各々奇を闕い

春醪如涌泉 春醪しゅんろう 涌泉ゆうせんの如し。

(注)*茅屋唯三間……陶淵明「帰園田居(其一)」に「草屋八九間」とあるのを参照。*命席統堂麻……『儀礼』『郷飲酒礼』に「設席于堂麻」とある。

(訳)春の遊びは今どうだろう、風に臨んで昔を思う。——当時、町の西の道を散歩すると、洲は近くにあり、茅屋はただ三間の広さしかなく、麦を炊いて客をもてなした。客が多くて座りきれず、家の外まではみ出した。破り子(弁当箱)はおのおの趣向を競い、濁酒は湧き出る泉のようだ。

高陽在何処 高陽 何処に在りても

詩酒自不慚 詩酒 自ら慚じず。

折花或簪頭 花を折り、或いは頭に簪し

摘蔬旋入盤 蔬を摘みて旋ち盤に入る。

氍毹屢移坐 氍毹くゑ屢々坐を移し

水厓又樹陰 水の厓し 又た樹の陰かげ。

醉歌互相属 醉歌 互いに相い属つらなり

樽尽興未尽 樽尽くるも興未だ尽きず。

沽酒水西村 酒を水西の村に沽かううも

扁舟帰来遅 扁舟 帰り来たること遅し。

(注)*高陽……酒飲み。

(訳)酒徒はどこにいても、詩と酒だけは人に負けない。花を折って髪に挿し、野草を摘んで、すぐに皿に並べる。水の岸、木の陰と、敷物を

あちこち移す。酔いまた酔い、酒樽が尽きても興は尽きない。川の西の村に酒を買いに行ったが、小舟はなかなか帰ってこない。

疑向桃花岸 疑うらくは、桃花の岸に向かい

殷懃問秦代 殷懃いんぎんに秦代を問うかと。

又恐爰朴俗 又恐る 朴俗を愛し

其中長孫兒 其の中に孫兒を長ながてるかと。

倏然斜陽裏 倏然しゅうぜんとして斜陽の裏

波揺一棹回 波を揺らし一棹いちせうし回る。

欲呼相劳問 欲呼して 相い劳問し

洗觴更侑醉 觴を洗すすいで 更に酔うを侑すすむ。

不覚白日没 覚えず 白日没し

夕露下我衣 夕露 我が衣に下る。

(注)*問秦代……陶淵明「桃花源記」では、桃源郷の民は秦時の難を避けこの村に來たということになっている。*洗觴……「洗盃」は「前赤壁賦」にある。

(訳)桃花源に行つて、懇ろに秦代のことを尋ねているのかと疑う。また、素朴な風俗を愛し、そこで子孫を育てようとしている(そこに定住してしまふ)のではないかと心配になる。

急に日暮に近づき、棹挿しながら波を揺らして帰る、大声で声を掛け、杯を洗いさらに酔うよう勧める。気が付くと、太陽は没し、夜露が衣を潤していた。

初月出林端 初月 林端に出で

皎々照花枝 皎々として花枝を照らす。」

此興君何日 此の興君何れの日ぞ
索居我不再 索居して我再びせず。
尊前会相思 尊前たまは会たまは相たまはい思たまはわば
帰鴻寄一詩 帰鴻に一詩を寄せよ。

(注)*尊前会相思……「長恨歌」に「天上人間会相見」とあるのを参照。
*帰鴻……帰雁は春、北に帰る雁。

(訳)月は林の端に出て、皎々と花の枝を照らす。——このような興を君はまた楽しんでいるのだろうか。私は寂しく暮らし、二度と味わってはいない。酒樽を前にもし思い出すことがあれば、北に帰る雁に詩を託してくれ。

*大阪での遊び(自由な生活)を懐かしむ。

一四、寒泉寄題。此君泉也、泉在筑紫竹中郷、柳川属邑

(「寒泉」寄題。此れ君泉なり、泉筑紫竹中郷に在り、柳川が属邑なり)(三章)

*寄題とは他の土地で題詠すること。詩体は『詩経』に倣っていると思われる(『履軒古風』序に「有做于三百篇(三百篇とは『詩経』のこと)」と言う)。末尾に「寒泉三章、二章八句、一章十二句」とある。

(第一章)

冽彼寒泉 冽たり彼の寒泉
柳城之南 柳城の南
孔潔且芳 孔くわだくわ深くわく且つ芳し

其流潺々 其の流れ潺々たり

(訳)清い彼の寒泉は、柳川の南にある。極めて清潔で芳しく、その流れは潺々としている。

可以汲兮 以て汲むべく
僻在幽陰 僻かたりて幽陰ゆういんに在り
鳥啞々兮 鳥う啞う々うたり
除其垢塵 其の垢塵を除く

(注)*可以汲兮……『易経』井卦、九三に「可用汲、王明並受其福」とあり、「九五」に「井冽、寒泉食」とある。

(訳)汲むに値し、静かな蔭にある。鳥が楽しげに鳴き、その塵を洗い除く。

(第二章)

冽彼寒泉 冽たり彼の寒泉
在竹之郷 竹の郷に在り
其流潺々 其の流れ潺々たり
孔潔且芳 孔くわだくわ深くわく且つ芳し

(訳)清い彼の寒泉は、竹中郷にある。その流れは潺々として、極めて清潔で芳しい。

于以酌之 于こに以て之こを酌しやくめ
于彼公堂 彼の公堂こうたうに于いてす
豈弟君子 豈か弟ていたる君子
錫以嘉名 錫かうるに嘉名かを以てす

(注) *豈弟君子……『詩經』「大雅」『洞酌』に「凱弟(II)悌君子、民之父母」とある。*錫以嘉名……『離騷』に「鑿錫余以嘉名」とある。

(賦)ここに、お上に薦め、和らげる君子はよき名を与える(高く評価する)。

(第三章)

嘉名伊何 嘉名伊れ何

此君之比 此れ君の比

孔潔且芳 孔だ潔く且つ芳し

四時弗改 四時改めず

(賦)よき名とは何か。それは君の輩ということ。極めて清潔で芳しく、何時も変わらない。

君子攸則 君子の則る攸

我其驩愧 我其れ愧ずる驩し

此君之榮 此れ君の榮

歌之詩之 歌い時にせん

(賦)君子が則とする所に、私は羞じる点がない(きちんとしている)。これは君の誉れだ。歌にし時にしよう。

一物之懿 一物の懿

君子弗遺 君子遺さず

矧伊人矣 矧んや伊の人をや

庶無逸才 庶くば才を逸す無きを

(賦)すばらしい物は、君子は見逃さない。この人ももちろんそうだ。この人の才能を見落とすことがありませんように。

一五、宿居易館(居易館に宿る)

*居易館は、履軒の弟子の竹島實山の居所。春の作。

凄々雨余天 凄々たり雨余の天

梅柳澹暮色 梅柳暮色に澹し。

杖履偶經過 杖履偶ま經過す

西門隱士宅 西門隱士の宅。

庭靜草芊々 庭は靜かに草芊々たり

烏啼春寂々 烏啼き春寂々たり。

杯盤隨有無 杯盤は有無に隨せ

微醉情自適 微さか酔えば情自ら適う。

經史諱方澹 經史の諱方に澹に

茶鼎海漸瀝 茶鼎の海漸瀝たり。

憂病恐君医 憂病は君が医に恐り

留連與未索 留連として興未だ索さず。

借問夜如何 借問す夜は如何

且恐塗昏黒 且つ恐る塗昏黒たるを」と。

主人援我止 主人我を援きて止め

相對双肱曲 相對して双り肱を曲ぐ。

欲眠聞鐘音 眠らんと欲して鐘音を聞き

膠疑禪房宿 膠ちて禪房の宿かと疑う。

(注) * 肱曲……『論語』述而篇に「飯疏食、飲水肱曲而枕之、樂亦在其中矣」とある。

(訳) 凄々たる雨の日、梅と柳は暮色に霞む。杖つき履穿き、たまたま西門の隠者の宅を通り過ぎる。

庭は静かに草は茂り、鳥は啼き春は寂々。食器はあるに任せ、ほろ酔い気分が心地よい。

経史の話も聞に、茶釜が静かに沸き立つ。鬱病をあなたに癒され、興はまだ尽きない。

「ちよっとお尋ねします、今夜はどうされますか、道も真つ暗ですよ」と、主人は私を引き留め、相対して肱を曲げ枕にする。眠ろうとして鐘の音を聞き、禅房に宿っているかと疑う。

* 隠者(竹島實山か)と語らう。今の言葉で言うとかウンセリングか。学問の話に飢えていた様子がわかる(「偶成」を参照)。

一六、東山口号

* 口号は口を衝いて出る即興の作。春の作。

乘暗訪花信 晴るるに乘じ 花の信りを訪えば

天寒春色遅 天寒くして 春色遅し。

擬伴少同調 伴を擬るに 同調少なく

ト遊多屈指 遊びをトすれば 屈指多し。

東山自有妓 東山 自ら妓有り

謝公不醉帰 謝公 酔わずして帰る。

(注) * 謝公……晋人謝安は会稽の東山に隠遁し、芸妓を伴って遊んだ。

李白「示金陵子」時に「謝公正要東山妓、携手林泉処処行」、李白「携妓登梁王樓霞山孟氏桃園中」時に「謝公自有東山妓」の句がある。* 東山……東山には料亭も多く、遊山の客はよく娼妓を連れて訪れたらしい。

有名な花街祇園に近い。中島棕隠『鴨東四時雜咏抄』(一八二六)に「瑞竜山南禪寺、……寺前酒店亦有声価、遊客每携娼妓、嬉娛于其間」とある(『葛子琴・中島棕隠』江戸詩人選集六、岩波書店、一九九三)。

(訳) 晴れに乗じて花の便りを問えば、天候が寒く春はまだまだだ。伴を募っても同調する人は少ないのに、遊びに誘うと賛成する人が多い。東山にはもとより芸妓が多いが、謝公は酔わずに帰った(から見つからない)のだ。

一七、古意

* 古意とは懐旧の念。詩題の名。春の作。

誰瀧相思涙 誰か相思の涙を瀧ぎ

寄之大江流 之を大江の流れに寄せん。

江流再不復 江流は再び復らず

南去日悠々 南に去りて日々悠々たり。

誰題加餐字 誰か加餐の字を題し

繫之北帰雁 之を北に帰る雁に繫がん。

帰雁声々度 帰雁 声々と度り

天高不可攀 天高くして攀すべからず。

孤客勞夢魂 孤客 夢魂を勞す

南国春応残 南国春^{まさ}応に^た残すべし、と。

(注)*日悠々……『履軒古風』卷三「長楽卜居答人(又)「帰阪後の作」に京都行について「朱門雖良楽、客思日悠悠」との表現が見える。

(歌)誰が相思の涙を流し、それを大河に寄せるだろう。だが、川は流れて戻らず、南に去り、日々悶々とする。

誰が私を思い手紙を書き、それを北に帰る雁に結ぶだろう。だが、帰雁は鳴きながら渡るも、天は高く、上ることができない。

孤独な旅人はただ空しく、南国の春が終わろうとしているのを夢見る。

*大阪への思いを綾々として訴える。

一八、奉酬伯兄及諸友見懷諸作

(奉^{つと}みて伯兄及び諸友に懷^なむる諸作に酬^くゆ)

*梅雨の作。

濛々黄梅雨 濛々たる黄梅の雨

寂々孤客館 寂々たる孤客の館。

故園南望目 故園南に望み目

親朋隔水雲 親朋水雲を隔つ。

閑中俯懷旧 閑中俯して旧きを懐い

不知客入門 客の門に入るを知らず。

忽擲金玉声 忽ち金玉の声を擲げ

驚起脆腕之 驚き起きて脆きて之を腕む。

累々瓊瑤光 累々たる瓊瑤の光

照我草堂裏 我が草堂の裏を照らす。

群英と満堂の酒と 群英と満堂の酒と

吾が魂 便ち飛ばんと欲す。 吾が魂 便ち飛ばんと欲す。

胡ぞ料らん 彩毫の下 胡ぞ料らん 彩毫の下

輒及朽靡姿 輒ち朽靡の姿に及ぶを。

漸汗泚然流 漸汗 泚然として流れ

沾衣与涙俱 衣を沾らす 涙と俱に。

睽離如昨日 睽離すること 昨日の如し

倏已離寒暑 倏として已に寒暑 離る。

豈無詩酒伴 豈に詩酒の伴無きや

況有泉石美 況んや泉石の美有るをや。

新交欲未洽 新交の欲び未だ洽ねからず

衷情向誰裁 衷情 誰に向かいて裁へん。

篇什半述旧 篇什半は旧を述べ

飲来悲即生 飲来たれども 悲しみ即ち生ず。

多謝有声画 多謝す 声画有るを

須臾接龍光 須臾にして龍光に接す。

更知脊令原 更に知る 脊令の原の

草色描不成 草色は描けども成らざるを。

(注)*脊令原……『詩経』「小雅」「常棣」に見える。兄弟が互いに難を救う喻え。

(歌)しとしと梅雨の雨が降り、孤客の館は寂しげだ。南に故郷を望んでも、親朋は水や雲の彼方にいる。

閑中、伏して昔を懐い、客が来たのにも気づかない。急に声を掛けら

れ、驚き起きて手紙を拝読する。

数多の玉の光が、私の草堂を照らす。並み居る秀才に数多の酒。ああ、今すぐ飛んで帰りたい。

なんと美しき筆跡はすべて朽ちた私を思うもの。慚愧の汗がしとど流れ、涙とともに衣を濡らす。

別れたのは昨日のようなのに、すでに季節は一巡り。京都にも詩酒の友はいる、まして風景は美しい。

だが、新しい付き合いはいまだ打ち解けず、この気持ちに訴える相手がない。文章を書いても半分は昔のこと、歎びを感じてもすぐに悲しくなる。

このように生き生きとした知らせをいただいたのはうれしいが、脊令の原の草色は描こうと思っても描けないことを思い知らされた弟思いの兄も自分の窮状を救うことはできないのだと思ひ知らされた。

*自分を思ってくれている大阪の人々に感激し、涙している。自分を「朽廃姿」、自分の住まいを「孤客館」と表現。

一九、碧山楼陪昔公、賦奉酬

(碧山楼にて昔公に陪し、賦して奉みて酬ゆ)

*碧山楼とは宴会の間か。夏の作。

把酒上高楼 酒を把りて 高楼に上り

凭檻緡黄卷 檻に凭りて 黄卷を緡く。

皎月辨秋毫 皎月 秋毫を辨じ

薰風漪衣襟 薰風 衣襟に漪つ。

酷吏喪氣焰 酷吏も氣焰を喪い

燭奴就棄捐 燭奴も棄捐に就く。

札教覓野人 札教は野人に覓く

促席劇談論 席を促くして劇しく談論す。

慚懷散木質 慚ず、散木の質を懷き

空懸燕台金 空しく燕台の金に懸かるを。

(注) *酷吏……大昏の擬人的表現。 *燭奴……蠟燭の擬人的表現。 *燕

台……「隗より始めよ」の故事で有名な燕の昭王が、台を築いてその上に黄金を置き賢者を招いた故事(『蒙求』『燕昭築台』、鮑照「放歌行」文選)卷二八。他『史記』『燕召公世家』を参照。君主に優待されること。

(訳)酒を取って高樓に登り、欄干に倚って書物を緡く。明月は物をくつきり浮かひ上がらせ、薰風は衣に滴ちる。

酷暑も退散し、蠟燭もお払い箱。野人には礼儀もゆるくされ、膝を突き合わせて談論する。

生来の役立たずが、無駄に重用されていることを恥ずかしく思う。

*昔公と親しく語らいあつた様子が表現されている(跋文を参照)。ただ、結びで自らの無能を嘆く。あまりアピールできなかったか。学問についての議論しようだが、履軒の知的興味を満たす話ではなかったというのが実情か。

*『懷徳堂考』下六三頁に「昔家の碧山楼に在ること一年」とあり、碧山楼を履軒の居所のように言う(『中井竹山・中井履軒』も同様)が疑わしい。『履軒古風』卷三「奉酬吏部昔公三首」中にも「空懷碧山楼、山色今何如、黄葉已搖落、白雪正婆娑、詩賦君所獨、樽酒我嘗侍」とある。眺めのい

い、寢を催す場所であろう。

二〇、鴨林納涼

*鴨川の川床であろう。おそらく夏の作。

溪林不盈尺 溪林 尺に盈たず

醉倚水中牀 酔いて倚る 水中の牀

喬樹漏星月 喬樹 星月を漏らし

露氣滴衣裳 露氣 衣裳に滴つ

(訳)川辺の林は一尺に満たず、酔って川床に寄りかかる。

高木から月が漏れ出で、露の気が衣に滴ちる。

*美しい情景を詠む時ほどどこか悲し気。大阪を詠う時生き生きしているの(「憶旧遊寄早土著」とは対照的である)。

二一、九歎 節二

*九つあった中の二つ(以下の「歎毀」「歎拘」)だと言うが、『楚辭』に倣つて題名だけであろう。

歎毀(右 毀りを歎く)

*原文では末尾に「右歎毀」とあるのを冒頭に移した。

何浮雲之塵日兮 何ぞ浮雲の日を塵ぐ

当天而喪光 中天に当たりて光を喪う

白日胡環兮

鬱蒙々以冥々

我陟喬山兮

遠出乎雲霧之上

天晴朗而無翳兮

日嚇々以炫々

俯瞰浮雲之態兮

憫乎下土之人

白日胡環あらん

鬱蒙々として以て冥々たり

我喬き山に陟り

遠かに雲霧の上に出づれば

天晴朗たりて翳無し

日嚇々として以て炫々たり

浮雲の態を俯瞰し

下土の人を憫む

(訳)どうして浮雲が日を遮り、空を覆って光を奪うのか。太陽は完璧なのに、濛々とまた黒々としている。

私は高山に登り、遙かに雲の上に出れば、天は晴れわたり翳りなく、日は燦々と輝く。

浮雲の様子を俯瞰し、地上の人を憐れむ。

夫子思之明哲兮

悼道路之荒蕪

發憤著書兮

坦履祖武

何小人之無憚兮

指為回邪之塗

夫子與之抗言兮

聞仁義之充塞

何衆人之嫉妬兮

擠為從橫之學

夫れ子思の明哲たる

道路の荒蕪するを悼み

発憤して書を著し

坦として祖武を履むも

何ぞ小人の仰り無き

指して回邪の塗と為す

夫れ子思の言を抗うや

仁義の充塞するを聞くも

何ぞ衆人の嫉妬する

擠いて從横の學と為す

(注) *発憤著書……もと司馬遷が『史記』を書いたことについて言う。子思は『中庸』などを著したとされる。*子輿……孟子のこと。*從横之学……縦横に同じ。諸子百家の一つに縦横家があった。ここでは権謀術数のこと。

(訳) 子思は聡明で、世の道が荒れるのを痛み、発憤して書著し、坦々と先人の後を継いだ。だが、何と小人物の恥知らずなことか。よこしまな道だと決めつけた。

孟子は激しく議論して、仁義の閉塞を開いた。だが、何と衆人の嫉妬深いことか。権謀術数だと蔑んだ。

蒼蠅之晒黄鸚兮

蒼蠅の黄鸚を晒うに

以弗食乎應徑之道殺

應徑の道殺を食らわざるを以てす

蚯蚓之哈龍蛇兮

蚯蚓の龍蛇を哈うに

以弗飲乎洗旁之弃水

洗旁の弃水を飲まざるを以てす

以險隘之鄙心兮

險隘の鄙心を以て

量乎睿知之盛府

睿知の盛府を量るも

夫胡相容兮

夫れ胡ぞ相い容れんや

所以紛乎毀譽

毀譽に紛れる所以なり

(注) *應徑……『礼記』『月令篇』では「應陘」に作る。

(訳) 蠅は、大鳥が鷹の周りの残飯を食べないことを嘲り、蚯蚓は、龍が洗い場の廃水を飲まないことを嘲る。このように、狭く険しく卑しい心で英知の心ばえを判断しようとしても、どうして可能だろうか。毀誉褒貶に終始するだけだ。

孰生乎今之世兮 孰か今の世に生まれ
能避乎黜点之汚 能く黜点の汚れを避けん
辨毀譽之濼々兮 毀譽の濼々たるを辨じ
徒作斯煩言 徒らに斯の煩言を作す
維守心之直諒兮 維れ心の直諒たるを守り
死至矢無避 死至りても避る無きを矢う

衆人之言兮胡足恤 衆人の言 胡ぞ恤うるに足らん
与昔人期兮其無慚 昔人と期す 其れ慚ずる無きを

(訳) 今の世に生まれて、誰が讒言の汚れを避けることができよう。毀誉の煩いを弁じ、空しくこの繰り言をする。ここに、正直な心を守り、死んでも節を曲げないことを誓う。衆人の言など気にする必要はない。古人に恥じないことを約束する。

*非りを嘆く賦。高みに登り、世界を俯瞰するのが「羈鳥辞」と共通する。俗世で非りを免れることはできない、その中で、私は良心に恥じないことだけを行い、昔の賢人に恥じないことだけを行いたいと言う。「坦履祖武」に、履軒という名の含意を眺みとることができる。ここに述べられた内容は、その後の履軒の生き方を暗示するかのようだ。履軒の生き方宣言と言えようか。

*「幽情賦」「履軒吟」(ともに『履軒古風』巻一所収)でも、古人に恥じることなき人生を誓う。

歎拘(右 拘みを歎く)

*原文では末尾に「右歎拘」とあるのを冒頭に移した。

日月之繫乎天兮

日月の天に繫り

沛且夜而周旋

沛として且夜 周旋し

無始而無終兮

始め無く終り無し

若無端之環

無端の環の若くんば

孰上而孰下兮

孰れが上にして孰れが下ならん

若黃白之卵

黃白の卵の若く

赫煌々無改其度兮

赫煌々として其の度を改むる無くんば

胡中虧之可言

胡ぞ中虧の言うべき

(注)*無端之環……太陽や月の軌道を言うのだから。 *若黃白之卵……渾天説か。

(訳)日月は天に懸かり、朝も夜も盛んに巡り、始めもなく終わりもない。もし、端のない輪のようなならば、どちらが上でどちらが下になるのだから。

もし、卵の黃身と白身のように輝いて不動ならば、満ち欠けをどう説明するのか。

維中之与辰兮

維れ中ると辰と

自人之国

人の国よりす

盈之与食兮

盈ちると食すると

自人之目

人の目よりす

夫以人目之眇兮

夫れ人目の眇と

与人国之藪

人国の藪さきとを以て

以規乎大之日兮

以て大なる日を規り

梁平臣之月

臣の月を梁り

欲其無我違兮

其の我と違ふ無きを欲するは

何為計之惑且拙

何為れぞ計の惑かにして且つ拙き

(校勘)中之島図書館本は「人之国」を「人云国」に誤る。

(訳)日が昇り沈むのは、人の国から言ったものだ。

月の満ち欠けも、人の目から見たものだ。

そもそも、人の小さな目と人の国の小ささでもって、大いなる太陽を測り、家来である月を測り、自分に合うよう求めるのは、何と愚かで拙い考えはないか。

仰食而修徳兮

食を仰ぎて徳を修むるは

何有不可

何ぞ可ならざる有らん

弗食而不修兮

食せざれば修めざるは

云如之何

之を如何せんと云う *云にか(?)

貶饌而賁兮

饌を貶めて賁め

擊鼓而救

鼓を撃ちて救うも

日月其解顔兮

日月 其れ解顔し

驟然而笑

驟然として笑う

歴失而慶兮

失を歴て慶し

躡雲而賀

雲に躡れて賀するも *天を無批判に敬つても

日月其含暄兮

日月 其れ暄りを含み

咄爾而呵

咄爾として呵る

(訳)日食や月食を仰いで徳を修めるのは、結構なことだ。だが、日食や月食がなければ徳を修めないのは、どうしたことか。

お供え物を乏しくして天を賈めたり(普通は天を怒らせるような行為)、
攻撃の合図である太鼓を援護する場合に打つても(世の道理に反するよ
うな行為)(?)、日月は(おかまいなしに)相を崩し、にっこりと笑う
(?)ともある(?)。

過失を犯して祝つたり、黒雲垂れ込めて祝つたりしても(両者とも本来反
省すべき事態)(?)、日月は(おかまいなしに)腹を立て、こらうと怒る
(?)ともある(?)。

夫上古神聖之知兮

固有未徧

豈有意乎開設兮

故立庸主之鑒

後人之知兮

亦有所屆

飛籜布教兮

植表而推秋

毫弗遁兮

千載可致

孰牽於先習兮

病於後知

孰岐數与理兮

乘腦而左右

夫れ上古の神聖の知すら

固より未だ徧からざる有り

豈に開設に意有りて

故に庸主の鑒を立てんや

後人の知も

亦た届る所有り

飛籜し布教し

植表し推秋し

毫も遁わざれば

千載も致すべし

孰か先習に牽かれ

後知を病まん

孰か數と理とを岐り

腦に乗りて左右せん

(校勘)腦……原文では片偏。

(注)*飛籜布教……籜は竹の棒。飛籜も布教も占いすることであらう。

引いて、籜も教もはかりごとの意がある。*植表……目標を立てる。

(歌)古代の聖人の知にも至らないところがあった。どうして、わざわざ
意図的に凡庸な君主の規範を立てるだろう。

後世の人の知でも優れたところがある。

十分に推し置り目標を立て、時を見極め、少しも過失がなければ、千年
先のこともわかる。

誰が昔の知恵に引きずられて、後世の知恵を損なうだろう。
誰が定めと道理とを区別できずに、両者の間で迷うだろう。

夫地之小兮

万国某着

為君徳食兮

万君齊淑慝耶

万国之俗兮

有微有惡

従日月而親兮

何曾有疏戚

夫れ地の小さきや

万国 某着し

君徳の為に食せば

万君 淑慝を齊しくせんや

万国の俗は

微しき有り 悪しき有るも

日月より親れば

何ぞ曾て疎戚有らん

(歌)そもそも、地は小さくて、万国が密集している。君主の徳のために
日食月食があるなら、万国の君主は徳を同じくするのか。
万国の風俗は卑しいのも良くないものもあるが、日月から親れば、どうし
て親疎の別があらう。

太虚為室兮

日月為目

若鏑者地也

太虚を室と為し

日月を目と為し

鏑の若きは地なり

如肉与菜者国也

滴之停者海也

沫之浮者島嶼也

氛埃之棲者人也

日月雖至明兮

烏能別乎氛埃之小大与橢圓哉

肉と菜との如きは国なり

滴の停まるは海なり

沫の浮くは島嶼なり

氛埃の棲まるは人なり

日月 至明なりと雖も

烏んぞ能く氛埃の

小大と橢圓とを別たんや

(注)*『履軒古風』会感 観天地第一、『天経或問雕題』共に、地・人の
小ささを強調する。

(歌)天空は部屋で、日月は目で、鍋のようなのが地、(その中の)肉と野菜が
国であり、汁の溜まっているのは海である。泡の浮いているのは島で、塵のじつと
しているのが人である。

日月は極めて聡明でも、どうして塵の大きさと形とを区別できようか。

*高みに立ち、世界を俯瞰するという点が先の賦と共通する。世間の人が成見
に囚われて、天人相関を信じているのを喝破する。履軒は、伝統に囚われない科学的な
宇宙観を持っていたとされる。その精神的根拠をここに
見ることが出来る。

*題からして『楚辞』を意識している。あるいは日本版「天問」と言えようか。

(参考)『真陰集(文集)』巻五「与弟处叔」に「郷也見示九嘆之二、切中
異言之病、深得聖字之要、屈宋之時、豈有是識也哉。至於其字琢句磨、
古色鬱然、所謂奴僕命騷者、非邪。愚兄其欲焚筆研。」とある。

*奴僕命騷(奴僕もて騷に命ず)……杜牧「李長吉歌詩叙」で李賀を
称える言葉。李賀をもう少し生かしておけば「離騷」も奴隷とする
ような大家となったであろう、の意。

二二、遊高台寺(高台寺に遊ぶ)

*高台寺は東山にある、秀吉の北の政所ゆかりの寺。春の桜と秋の萩が有名であった『都名所図会』安永九年(一七八〇)、『日本名所風俗図会』
8京都の巻II「角川書店、一九八一」による。寛政元年(一七八九)を始め、
三回の火事を経て今では建物の多くは消失したが、履軒が訪れた当時は
堂々たる伽藍が存在した。秋の作。

金碧梵王殿 金碧の梵王殿

豪華在当年 豪華 当年に在り

满地秋草露 满地 秋草の露

唧唧聽虫音 唧唧として虫音を聴く

(歌)光り輝く大伽藍、当時は豪華だった。

今は地面いっぱい秋草の露、チツチと虫が鳴く。

*往年の豪華と今(秋)の静けさとを対照する。「鴨林納涼」と同じく寂しげ
に詠う。

(参考)『真陰集(詩集)』巻二「弟处叔与諸子高台寺賞萩花書報曰花不適
詩料因有此寄」(弟处叔 諸子と高台寺に萩花を賞し、書もて報じて
「花 詩料に適わず」と曰う。因りて此の寄有り)と題する詩がある。

そこで、竹山は、萩の花を詠まなかつた履軒に「花は咲いているのに酒ばかり飲んで時を作れなかつただけだろう」と揶揄している。ちなみに、寛政十一年（一七九九）刊の『都林泉名勝図会』には、「秋高台寺に過（こ）して芳宜（よ）の花を見る」と題する竜公美作の七絶がある。

二三、答早土管（早土管に答う）（三首）

*早土管は早野仰斎（名辨之、宇土管）。「永輔義佐寄酒鶏子来、題簡背附之」時参照。仰斎から宋達を祝う内容の書が届いたのだろう。

野人弊衣裳 野人弊れし衣裳もて
日接馱冕光 日々馱冕の光に接す。
浮游与時俱 浮游は時と俱に
豈是貧寵榮 豈に是れ貧寵榮せん。

（訳）粗末な衣を着て、日々礼服のお偉い方と接す。ただ時任せにぶらぶらする。貧乏人がどうして恩寵に浴しよう。

其二

君作南郷遊 君は南郷の遊びを作し
吾為北京羈 吾は北京の羈と為る
旧欲若相思 旧欲若し相い思わば
恐在垂輪時 恐らくは垂輪の時に在り

（訳）君は南の郷に遊び、私は北の京都で旅人となる。昔のことを思い出すとすれば、きつと共に釣りした時のことだろう。

其三

門無五株柳 門に五株の柳無く
又無黄花園 又た黄花の園無し
閑却淵明廬 閑は却って淵明の廬
空望白衣人 空しく白衣の人を望む

（注）*陶淵明は家の前に五株の柳を植え、「五柳先生伝」を著した。また陶逸の境地を詠った「飲酒（其五）」中の「採菊東籬下」は有名。

（訳）門に五株の柳もなく、菊の花園もない。だが酔けただけは陶淵明の庵と同じ。空しく世捨て人に憧れる。

*心は既に陶淵明になっている。「白衣の人」（以下「南帰途中口号」の「未化旧素衣」を参照）に対するあこがれを表現。

二四、懷魚膾賦（魚膾を懐い戯れに賦す）

*魚膾は刺身。鯛の刺身を懐かしむ。秋の作。

洛城一夜秋風動	洛城 一夜 秋風動く
江南魚膾今如何	江南の魚膾 今 如何。
氷盤盛来白銀片	氷盤に盛り来たる 白銀の片
菊絲蘘花顔色無	菊絲 蘘花 顔色無し。
芥漿澆下著一攪	芥漿に澆し下し 著けて一攪すれば
甘脆芳潔絶比喩	甘脆 芳潔 比喩を絶す。
海中鱗物豈可数	海中の鱗物 豈に数うべけんや
至味却風至少者	至味 却って 至りて少なき者に属す。

譚名車喚魚旁弱
姓名皆逸神農書

譚名車えに喚ぶ魚旁に弱
姓名皆て逸す神農の書。

張翰元來不相識

張翰元來相い識らず

所以偏懷江中鱸

所以偏えに江中の鱸を懷う。

試把鱸膾相陪侍

試みに鱸の膾を把りて相い陪侍すれば

厨下只好飼婢奴

厨下只だ婢奴を飼うに好きのみ。

帰心今日在此物

帰心今日此物に在り

口頭一占吊餓肚

口頭一たび占れば餓肚を吊る。

〔校勘〕著一攪……『洛酒奚囊』手稿本、中之島図書館本、『履軒古風』手稿本は「蒼」に作るが、『履軒古風』北山鈔本は「蒼」に作る。

〔注〕*張翰……張翰が故郷の鱸を思い、官を辞して故郷に帰った故事
〔蒙求〕「張翰適意」。「陶潛帰去」と対で述べられる。

〔歌〕京都である夜、秋風が吹いた。ああ、大阪の刺身は今どうだろう。透き通った皿に盛りつければ、大根の妻も茗荷も顔色を失う(たじたじ)。山葵醤油に浸けて一掻きすれば、甘く歯融りよく香り豊かで滑らかなことは官語を絶する。海の生き物は数え切れないが、美味しい物は多くない。譚名は魚偏に弱い。姓名は神農の書『本草』から漏れている。張翰はこれを知らなかったたので、ただ川の鱸を思ったのだ。試みに鱸の刺身を持参し相伴させると、台所でもべに食べさせるしかないだろう。私が帰りたいのはこのため。一言口に出すだけで腹が鳴る。

*大阪の刺身を絶賛。大阪を詠う時はなんと生き生きしていることか。

〔参考〕『箕陰集(詩集)』巻二に「得弟処叔思弱魚膾長句和一絶」があ

り、秋の陽射しが強すぎて味噌漬けにしないと送れないと返している。

二五、閑歩偶成

*秋の作。

起来曳短笻

起き来たり短笻を曳き

散步出郭門

散歩し郭門を出づ。

日出東岑上

日は東の岑の上に出で

爽氣烏雀喧

爽氣に烏雀喧し。

輕霧籠竹樹

輕霧竹樹を籠み

山色鬱不辨

山色鬱として辨せず。

川水雨余多

川の水は雨余に多く

滔々流我前

滔々として我が前を流る。

板橋追隨者

板橋に追隨する者は

芋栗裝其擔

芋栗を其の擔に装う。

秋景今已晚

秋景は今已に晚く

感焉感我心

感焉として我が心に感ぜしむ。

徘徊忘朝餓

徘徊して朝の餓えを忘れ

又過水東村

又た水東の村を過ぐ。

〔歌〕朝起きて短い杖を突き、散歩して町の門を出る。太陽は東の峰の上に出て、爽氣の中、鳥が騒ぐ。薄い霧が竹林に立ちこめ、山はおぼろにかすんで見える。川の水は雨後に増して、滔々と私の前を流れる。後ろから板橋にさしかかった人は、芋や栗を背負っている。秋の終わりを感じ取り、しみりとした気分になる。徘徊して、空腹も覚えずに、また

川の東の村を過ぎる。

*秋の郊外への散歩を詠う。「秋景今已晚、感焉感我心」は跋文の「感焉有感于懷」という文句を参照。

二六、九月十三夜

*秋の作。

晩秋十三夕 晩秋の十三夕

消賞比中秋 消賞 中秋に比す

深知古人意 深く知る 古人の意を

滴盈不再来 滴盈 再びは来ず

(注)*九月十三夜……日本では、陰曆九月十三夜の月は「のちの月」として、八月十五夜に次いでもてはやされた。履軒は「もろこしの今にも人はしら菊の露の葉末の秋の夜の月」『越吟』第三」という和歌も詠んでいる。

(訳)晩秋十三夜、その美しさは中秋の明月に匹敵する。古人が親しんだのもよく理解できる。(これが終われば)滴月は二度と来ないから。

*「滴盈不再来」はあるいは自分の境遇になぞらえるか。

二七、月下独酌、懷川上習之、此寄 十三日

(月下に独酌し、川上習之を懐い、此れを寄す)

*川上習之は『履軒古風』卷三に「答習之」がある。また竹山『箕陰集(詩集)』にも頻出する。例えば、卷二に「予近因貧断酒習之有詩見寄依韻和答」と題し「虚名噪世偽青蓮、多債難裁独酌篇、但教交友相邀飲、一斗依然旧酒仙」と詠む。酒飲み同士ならではの詩か。秋の作。

独对鳳城月 独り鳳城の月に対すれば

逝事萃我心 逝きし事 我が心に萃まる。

独酌不成醉 独酌し 酔いを成さず

惘然懷故人 惘然として 故人を懐う。

同社多才子 同社 才子多きも

詩酒偏思君 詩酒は 偏えに君を思う。

与君淀水舟 君と 淀水の舟で

幾載共金樽 幾載か金樽を共にす。

今我如別鶴 今 我は別鶴の如く

哀鳴慕旧林 哀鳴し 旧林を慕う。

一声遙相贈 一声 遙かに相贈るも

情急不拈音 情急にして 音を拈はず。

借問淀水月 借問す 淀水の月

一斗詩幾篇 一斗 詩幾篇。

秋老江魚肥 秋老いて 江魚肥ゆ

对酌復誰人 对酌するに 復た誰人かあらん。

偏憐山頭月 偏えに憐む 山頭の月の

照君詩酒船 君が詩酒の船を照らすを。

(校勘)『履軒古風』には「川上」がない。

(注)*別鶴……陶淵明「擬古」に見える。*暮旧林……陶淵明「帰園田居(其一)」「帰鳥恋旧林」とある。陶淵明には「帰鳥」と題する詩もある。

(訳)独り都の月に向かうと、過ぎ去ったことが次々と心に浮かぶ。独酌して酔うこともできず、気が滅入り旧友を懐かしむ。懷徳堂には才子が多かった。でも、詩と酒とで思い出すのは君。君と淀川で舟に乗り、何年酒樽を共にしたことか。今私は独りぼっちの鶴のように、哀れに鳴いて、故郷の林を慕う。一声 声を届けようとするが、情が極まってともに鳴けない。お尋ねする、淀川の月よ。一斗の酒で幾篇詩が作れるか。秋が深まって川魚も太ったことだろう。共に酌をする人はいるか。ひたすら不憫に思うのは、山の上に出ている月が君の詩と酒の船を照らすこと。

二八、丁亥仲冬辞京南帰、席上賦上菅公(丁亥仲冬京を辞して南に帰る、席上賦して菅公に上る)(二首)

*丁亥仲冬は明和四年(一七六七)十一月。

長缺欲帰去 長缺よ 帰り去らんと欲するも
難裁別離心 別離の心 裁し難し
慚無鶏鳴效 鶏鳴の效 無く
辜負孟菅恩 孟菅の恩に辜負するを慚す

(注)*長缺……『戦国策』「斉策」に、孟菅君に仕えた馮驩が、薄遇を嘆いて「長缺帰來」の歌を歌い、厚遇を得た故事がある。竹山『貧陰集詩集』巻二「擬送友人下第還郷」にも「馮缺向誰彈」とあり、挫折して帰郷する人の無念の表現に、この故事を使っている。

(訳)長剣よ、私はこれから帰るが、別離の心は表現しがたい。ろくな才能もなく、賢君のお役に立てなかつたことを申し訳なく思う。

(参考)下二句は『懷徳堂考』下六三頁に引かれている。

其二

誰憐窮巷士 誰か憐む窮巷の士を
曾為知己伸 曾て知己のために伸ぶるも
掃去兼葭岸 兼葭の岸に掃り去り
引領朔鴈天 領を引く朔鴈の天

(訳)誰がこの貧乏な士を憐れもう。かつては知己を得て意を伸ばすことができたが、今、葦の繁る岸辺へと帰り、首を伸ばして雁の帰る北の空を望むのだ。

*自らを「窮巷士」と表現。

二九、菅公賜補襦為贖、賦此奉謝

(菅公補襦を賜り贖と為し、此を賦して奉みて謝す)

縹々神女機 縹々たる神女の機もて
剪破嶺頭雲 嶺頭の雲を剪破し、

裁作遊仙服
霞彩帯波文
霞の彩に波文を帯ぶ。

離披春洞裏
春洞の裏うらに離披すれば

石床不覺寒
石の床にも寒さを覺えず。

豈料雲外物
豈に料はぶらんや雲外の物

落在野人身
落ちて野人の身に在るを。

再拝感何極
再拝し感何ぞ極まらん

別淚俱潺々
別淚俱ばなに潺々たり。

婦去充班衣
婦り去りて班衣ばんいに充つつれば

膝下即昼錦
膝下即ち昼錦。

(注)*春洞……『和漢朗詠集』「仙家」菅原文時「山中有仙家」時「石床留洞風空私」をふまえるか。そうすれば、自らを出家して洞穴で暮らす仙人に喩えていることになる。*膝下即昼錦……昼錦は錦の衣を着て昼行くこと。出世して故郷に帰る喩え。『蒙求』下「老葉斑衣」に、老葉子が歳七十にして、父母の前で模様のある派手な服を着て、赤ん坊のまねをし、孝養を尽くした話がある。

(訳)飄々とした神女の織り機で、峰に懸かる雲をちぎって、仙人の服を裁つと、霞の模様はなに波文を帯びています。春の洞で広げれば、石の床にも寒さを感じません。どうして予想し得ましょう。天上の物が、私のような野人の身に落ちてくることを。再拝して感極まり、(感激の涙が)別れの涙とともに流れます。婦むすめって班衣ばんいにあてれば、父母の膝元で故郷に錦を飾ることができます(*孝養も尽くせるし、故郷に錦を飾ることに)なり、一挙兩得である(ことを言っか)。

*履軒の父中井覺庵は一七五八年に既に亡くなっている。この場合、膝下というのは母であろう。

*佐野大介「中井履軒の「孝」観」『懷徳堂文庫の研究 共同研究報告書』湯淺邦弘編、二〇〇三から推察すると、履軒は「老葉斑衣」のような話好きでないし、信じないタイプのはず。

三〇、南帰途中口号(二首)

*口号は口を衝いて出る即興の作。

長缺已彈尽 長缺 已に弾じ尽くし

扁舟今帰来 扁舟 今帰り来たる

一揖京洛塵 一たび京洛の塵を揖たえば

未化旧素衣 未だ旧もとの素衣を化せず

(注)*長缺已彈尽……「丁亥仲冬辞京南帰、席上賦上菅公」注参照。
*未化旧素衣……晋陸機「為顧彦先贈婦」(『文選』卷二四)に「京洛風塵多、素衣化為緇」とある。また、『論語』陽貨篇に「不曰白乎、涅而不緇(孔子が自分が世の中の悪い風潮に染められないことを言った言葉)」とある。

(訳)すでに長剣を鳴らし尽くし、今私は扁舟に乗って帰り来る。一度京都の塵を払うと、白い衣は元のままだ。

其二

周歲京洛遊 周歲 京洛に遊び

胸襟飽烟霞 胸襟 烟霞に飽く

綿装何ぞ長物 綿装何ぞ長物

惟有奚囊富 惟だ奚囊の富める有るのみ

(歌) 京都で一年を過ごし、胸の内は京都の景色でいっぱいだ。帰りの荷物はなんと無駄なものだろう、ただ詩が増えただけだ。

*その増えた時の内容が「寂しさ」であることからすると、私の京都行は「虚しい思い」を味わっただけだと表明していることになる。

(参考) 履軒の手録『履軒小乗』中に京都行の携帯品目があるが、その末尾にこの詩が置かれている。『履軒小乗』には、おびただしい物品と書物名が記されており、西村、山中浩之ともに一時の仮寓の装いではなかつたと言う『懷徳堂考』および『中井竹山・中井履軒』。竹山「孤雁歌送処叔弟之京」(孤雁の歌。処叔弟の京に之くを送る)『奠陰集(詩集)』巻二)もこの京都行を履軒の独立と考えているようだ。『懷徳堂會儀詩巻』でも、参加者は京都行を履軒の出世ととらえている。『洛納奚囊』に見える早野仰斎らの便りも出世を祝う内容が多かつたと推測できる(「答早士蒼」三首)。そうであれば、なおさら履軒の挫折感は強まつたであろう。

(跋)

丙戌之冬、余北游于京、客於吏部督公門下。公神明之裔也。好學愛士、能忘其貴而為布衣之交。期年余辭而南還、則廬于長渠之上。拮据既竣、探囊得詩數十篇、皆京中之稿及往還途上之作。稍々披覽之、感焉有感于懷、弗忍毀也。取而次第之、命曰洛納奚囊、以供異日之觀云。嗟夫、余自京師至未數月也。然其動感既如斯、則異日髮種々而回顧少壯之遊于數十年前之

恐有不耐說者。

明和四年季冬朔

履軒幽人書 印(積二徳)

丙戌の冬、余北のかた京に遊び、吏部督公の門下に客たり。公神明の裔なり。學を好み士を愛し、能く其の貴きを忘れて布衣の交りを為す。期年にして余辭して南還し、則ち長渠の上に廬す。拮据 既に竣わり、囊を探れば詩數十篇を得。皆 京中の稿 及び往還途上の作なり。稍々之を披覽すれば、感焉として懷に感有り、毀つに忍びざるなり。取りて之を次第し、命じて洛納奚囊と曰い、以て異日の觀に供せんとしか云う。嗟夫、余京師より至りていまだ數月ならざるなり。然れども其の動感 既に斯くの如くんば、則ち異日 髮種々として少壯の數十年の前に遊ぶを回顧せば、恐らくは說むに耐えざる者有らん。

(注) *吏部……式部の唐名。高辻卿は一七六五年に式部大輔になつている(『公卿人名大事典』日外アソシエーツ、一九九四)。*長渠……長堀のこと。履軒は堀阪後、懷徳堂へは戻らず、長堀に居を構えた。*拮据……滞ること。*種々……髮が薄くなつた様。

(歌) 丙戌(一七六六)の冬、私は北の京都に遊學し、式部高辻卿の門下に客となつた。卿は由緒正しき家柄で、學を好み士を愛し、身分の違いを忘れて私と付き合ってくださつた。一年で私は辭して南に帰り、長堀の畔に庵を結んだ。ようやく落ち着き、詩の袋を探してみると詩が數十篇見つかった。すべて、京都での作もしくは往還途上での作である。いささか目を通してみると、しんみりと心に感じるものがあり、捨てるには忍びない。そこでそれらを整理し、『洛納奚囊』と名付け、將來の思い出として残すことにした。ああ、私は京都から帰つてまだ數ヶ月に過ぎな

いのにこのように感じるところがあるということは、将来髪が薄くなつて数十年の前の少壮の遊学を回顧すれば、恐らくは脱むに耐えないものがあるだろう。

おわりに

『洛汭奚囊』が表現しているのは京都での寂しさである。寂しさというのは、故郷への思いが一番大きいようだが、冷遇を示唆する表現もある(「聞槐庵兄落新居」答早土菴)。また、履軒は怠慢なく学問の話をすることを望んでいたが、それもままならなかったことが推測できる(「偶成」「宿居易館」「奉酬伯兄及諸友見懷諸作」「碧山樓陪菅公、賦奉酬」)。『洛汭奚囊』を見る限り、履軒にとって京都での生活は決して楽しいものではなかったようだ。飲びを感じさせるものは、旧友の訪問、手紙、大阪の自由な生活の想い出だけだったらしい(「永輔義佐寄酒鷄子來題簡背附之」「偶成」「憶旧遊寄早土菴」「答早土菴」「懷魚胎戲賦」「月下独酌懷川上習之此寄」)。そして、結局は高辻卿に重用されることなく、大阪に帰ることになった。あの大阪に帰れるという喜びもあるが、やはり無念と挫折感とは免れない(「丁亥仲冬辞京南帰、席上賦上菅公」「南帰途中口号」)。だが、この経験が私の生き方を再認識させてくれた。私はもう決して官仕えしようなどとは思わない。……履軒の気持ちはこのようであったのではなからうか。

履軒は、京都行以前にすでに隱逸的傾向と高みから物事を眺める視点とを有していた(はじめに「注三参照」)。そして、その傾向、視点は京都にいる時に一層はつきりとした(隱逸傾向・「述客中況、答早土菴」「宿居易館」、高み・「編鳥辞」「九歎」)。履軒にとって京都行は自らの生き方を再認識する経験であったと言えるかもしれない。履軒はその後、幽人として自らの精

神的王国華胥国に遊ぶが、その人生を決定づけたのがこの京都での一年だったと言えるのではなからうか。孔子が諸国遍歴の挫折を経た後に學問に専念し歴史に名を残し、子思孟子が発憤著書した(歎毀)ように、履軒はこの経験により、迷いなく學問に全精力を傾け得たのかもしれない。それが履軒にとって幸せだったかどうかは知らないが。

*履軒が一年で帰阪したことについて、西村時彦は、履軒が京都で皇室の衰微と公家の無氣力とを見、幕府の盛んな中、王道の行うことのできないのを悲しみ、仕官の念を断つたと推測する(『懷徳堂考』下六三頁)。だが、『洛汭奚囊』にはその推測の裏付けは見つからない。西村は、明治の時代思潮(あるいは自らの思想)を反映して、竹山・履軒を尊皇の志士に祭り上げようとする傾向があるので注意が必要である。

一方、帰阪後の私塾水鏡館設立について、山中浩之は、京都での生活で自信を得て独立を決定したものである(『中井竹山・中井履軒』一九六頁)。だが、京都行自体すでに自他ともに独立と認識したと考えられる(竹山・「孤雁歌、送処叔弟之京」『奠陰集(詩集)』卷二、拙稿『懷徳堂會餞詩卷』訳注―中井履軒京都行の送別詩―附録を参照。履軒・「既上舟、奉寄伯兄(其二)」また、自信を得たというのも『洛汭奚囊』の内容からは射したものと言ひ難い。

帰阪後の履軒についても、本稿同様に、履軒の詩文から探ることができ。それについては、稿を改めたい。

〔附録〕

「はじめに」で述べたように、履軒の漢詩集『履軒古風』の巻二は『洛
納奚囊』と重なるが、作品に出入がある。以下、その異同を記し、履軒の
心情をよく表している作品として「離恨」を載せる。

・『履軒古風』にあつて『洛納奚囊』にないもの……「離恨」「詠王祥伝」。
・『洛納奚囊』にあつて『履軒古風』にないもの……「離席」「奉答伯兄」「既
上舟」「奉寄伯兄三首」「曾朝奉呈晋公」「丁亥早春自邇省浪華至、題所携
梅花、上晋公」「碧山樓陪晋公賦奉酬」「遊高台寺」「答士卷 其二、其三」
「九月十三夜」「南州途中口号 其二」。

離恨

瞻彼北山 彼の北山を瞻み

發我南音 我が南音を發す。

清商入徵 清商徴に入り

凄惋動人 凄惋人を動かす。

有客問我 客有り我に問う

何為乎然 何なん為れぞ然るや、と。

人鮮兄弟 人兄弟あな鮮なく

他鄉離散 他郷に離散す。

素秋將央 素秋將に央まきんとし

草木且變 草木ま且まに變まぜんとす。

霧露侵体 霧露まを侵まし

思夢煩襟 思夢襟を煩わづす。

匪飢匪渴 飢あえず渴あせざるも

伏枕輾轉 枕あに伏あして輾あ転あす。

何日斂翼 何れの日か翼を斂あむること
于彼旧林 彼の旧林においてせん。

(注) *南音……南の音楽。 *清商入徵……商徴ともに古代中国の音階。
*匪飢匪渴……『詩経』「小雅」「甫田之什」「車牽」に見える。

(訳)あの北山を見て、我が南の音楽を奏でる。

調へは短調へと変わり、その凄まじさは人を動かす。

ある人が私に尋ねた。「どうしてこのようなのですか」と。

(私は答える)「兄弟が少ない上に、他郷に離散しているのです」と。

秋はまさに尽きようとし、草木はまさに色褪せようとしている。

露が体を侵し、悩ましき夢が心を苦しめる。

飢えも渴しもしていないが、枕に伏せて寝返りを繰り返す。

いつになったら、あの故郷の林で翼を休めることができるのだろう。

(大阪府立工業高等専門学校助教授)